

研究ノート

## 義務教育の指導と評価の考え方を 星城大学生への教授法に活用した事例報告

川 口 啓

### はじめに

本研究ノートは、星城大学で5年間お世話になったお礼を込めて実践してきたことを報告するものである。

研究テーマには、大学教育を逆なでするようにも解れる“義務教育の指導と評価の考え方”を活用していると記したが、これは、私が37年間小学校教員を務めて定年退職をしてから星城大学に勤務したので、このように考える外に策がなかったからである。

義務教育の指導と評価を学んだのは、名古屋市体育研究会での小学校と中学校の100名を超える多くの教師仲間と研究し合ったこと、愛知教育大学附属名古屋小学校で9年間附属校独特の全教科・領域を対象にした理論及び実践研究を行い研究会・公開授業をしてきたこと、平成9年からは、小学校体育の学習指導要領編集協力者を務めたことにより全国各地で実技研修会や実践研究会の講師を80回程務めたこと等の経験がその基盤になっている。その後の星城大学での5年間は、かつて小学生や中学生を対象にして指導や評価方法を追求した考え方に照らし合わせて、成長段階と実態の異なる星城大学生にいか

に教授するかと課題意識を持ち続けてきた。

そこで、本研究ノートでは、以下の2点をまとめることにする。

①義務教育で学んだ指導と評価を私流に整理し、大学での教授法（大学生へ教え授ける指導と評価のことと解釈している）のあり方を検討する。

②①の検討を踏まえて星城大学の学生に指導実践する。

ただし、大学生への教授方法を研究することが目的ではなく、あくまでも担当する科目の日ごろの教授法を実践レベルでささやかに工夫したものであることをお断りしておく。

## Ⅰ 義務教育の指導と評価の考え方の整理

義務教育の指導と評価の考え方を大学での授業と比較検討する。

### (1) 指導の考え方

大学では、教員は担当の科目のシラバスを作成して目標と指導計画等を立てることになるが、シラバスを立案する根拠となるのは、文部科学省の認可申請段階で教養教育科目群や専門教育科目群、教職に関する科目などと大きなくくりはあるものの、概ねこれまでの学問の研究成果であったり、学会の定説であったりする知見である。例えば、教育方法論という授業では、教育の方法と技術に関する歴史であったり、指導法の枠組みとなる理論であったりする。また保健体育科教育法では、教師が生徒に対して保健体育科の授業をどのように計画し実施するかといった指導場面の教師と生徒の関わり方である。

一方、義務教育では、学習指導要領が全国一律の教育課程編成の基準として公示されており、各学校では学習指導要領を基準として自校の教育課程を編成しなければならない。1) また、学習指導要領には目標と内容が書かれているので、教科の目標や学年目標、学ばせる内容が、発達段階を踏まえて学年（一部は2学年まとめて）ごとに示されている。

さらに、各教科には学習指導要領解説書があって、学習内容の例示や内容の取り扱いが詳細に載せられている。しかも、大部分の教科には教科書があり目標、学習内容を踏まえての教材が、子どもの実態を踏まえて検討し尽くして載せられている。単元名や単元計画、本時の指導計画までが想起できるようになっている。

つまり義務教育は、国の学習指導要領の告示や教科書検定制度によってどの学校でも多少の振れ幅はあってもほぼ同じ教育活動が展開できるようになっているのである。

そうした中で実に多くの教師が指導方法や評価方法の工夫をし、研究発表等を行っている。研究実践に関しては、大学のそれよりはるかに細分化されて綿密であると言える。

それに比べて、星城大学で行うFDの授業拝見週間は、授業を拝見して感想を文章に書くのみで、授業研究をしたり教師同士が互いに批評し合ったりすることは皆無と言ってよい。ただし、専門分野の研究活動は盛んであるが、大学での教授方法に関しては、教師の個人レベルで研鑽することになり、大学内や大学間で教授方法を共有したり磨き上げたりするシステムにはほど遠い。

そこで、義務教育の指導方法を参照すれば、私の授業を改善する抛り所が見い出せると考えたのである。

指導と評価の考え方は、平成20年9月20日の星城大学FD教育改善検討会議第2回経営学部全体会議で次のように発表した。2)

【指導を組み立てる一連の作業】

①	②	③	④	⑤	⑥
「目標」→「学習内容」→「教材」→「教具」→「教授行為」→「授業の実施」					

これは義務教育の体育科教育を例に、授業を組み立てるまでの手順を整理している。3)

次のような特徴がある。

①目標は、学習指導要領に明確に示されている。

②学習内容は、ほとんどの教科で解説書に例示されているが、教師は、解説書を参考に何を教えるのか、学ばせたい知識や技能、他者との関わり方を明確に

する段階である。

③教材は、学習内容を学ばせるために教え授ける材料を選定する段階である。特に子どもの実態や個に応ずる指導ができるように、多様な学びが可能になる良質な教材を用意する必要がある。子どもからみて、その教材に出会うと知識や技能、他者との関わり方を習得するための学習課題が明確になるものが望まれる。

④教具は教材の力を引き出すために、あるいは子どもの興味を高めるために教師が用意する物である。例えば、体育のリレー学習では、走りながらバトンパスを正確に行わせるために通常は棒バトンを使用するが、小学校低、中学年ではリングバトンを使用すると、どの角度からでも握りやすいためにパスミスが格段に減る。発達段階や実態に応じた柔軟な教具の工夫が、有効な手だてとなる。

⑤教授行為は、特に教員研修のテーマになりやすい。子ども個人や集団へ働きかける教師の言動の手順や方法などである。指示や説明、発問、演示、助言、賞賛、叱責等である。

⑥授業の実施に当たっては、まず、導入－展開－まとめの3段階を作ること。導入では、本時の「学ぶめあて」を明確にする。展開では説明、発問、少人数の話し合い、発表等を行わせ、子どもに活躍させる授業を展開する。まとめでは、シートへの記入、感想の発表、教師の話等で本時の学習内容のまとめと評価資料の収集等をする。

このような実に細かい教師の計画や授業での一挙手一投足に至るまで多角度から分析批評し合うのが義務教育の研究授業である。細かすぎて全体を見失うこともままあるが、細部を詰めて築き上げていくのが義務教育の現場流であるといえよう。

## (2) 評価の考え方

大学の評価法で最も驚くのは、出欠席を評価の材料にすることである。例えば、15回の授業の内1/3までの欠席は評価対象にするが、それを超えたら評価の対象から外し、単位不認定になる。この発想の根本は、出席は最低限の関心・意欲・

態度の度合いを示すものだという考え方である。学習への関心・意欲・態度は、授業中もしくは授業によって挙げた成果が如何ほどかを評価すべきものなのに、欠席と言う行為に対して判定するのはいかにも筋違いである。欠席者が多いという学生の現実、病気になるような健康管理や出席したくなる授業の工夫などの学習環境づくりによって解決すべきなのに、単位の認定という教師の権限で縛ろうとする発想は、義務教育の評価ではありえない。義務教育では、病気や心身の不調による不登校状態であっても、学校や自宅で学習しようと努力していれば学習の過程や結果を評価する。言ってみれば、子どもに対するやさしさや今後の成長に期待する気持ちが込められているのである。

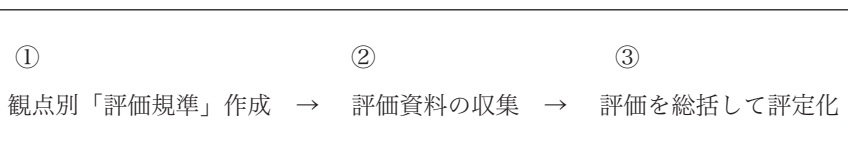
そこで改めて義務教育で行っている評価の基本的な方法と考え方を整理してみる。

義務教育の評価は、教育評価と限定しなければ理解しにくい。教育評価の目的は、児童生徒の学力や心身などの変化を、指導目標に照らして価値判定し、教育効果の向上を図るために行うものである。

●目標にどの程度到達したかの評価をする。(目標に準拠した評価)

そして、観点別の評価をする。その手順は次のようである。

【評価を組み立てる一連の作業】



①授業には、授業の目標があるが、その達成を見極めるために3～5点の学力観点を設け各観点ごとの到達目標を掲げてどこまで子どもが学んだかを評価する。そのためには観点別の「評価規準」を作り、この規準にどれくらい到達したかを質的にとらえる事前準備をする。

②評価資料は、授業進行中や授業後に以下の方法で学習状況を観点別に評価し、

評価データとして収集する。

【観点別評価の方法】

- 関心・意欲・態度・感想文（ミニッツ・ペーパー）、自己評価、教師の観察記録
- 思考・判断・ワークシート、感想文、構想案、構想図、制作図
- 技能・表現・作品、構想図、作業方法、実技テスト、発表会、自己評価・相互評価
- 知識・理解・ペーパーテスト・小テスト

以上の方法で集めた評価データを点数化したり、記号化したりして教師の評価ノートに記録する。通例、A 十分満足、B 概ね満足（評価規準レベル）、C 努力を要するの3段階で判断する。

また、5段階（5 4 3 2 1）化は、評価の総括で行うことになる。

最後に、期末に集めた評価のデータを集約して、観点毎の観点別評価を総括して5 4 3 2 1のように定めた評定にする。

- 5 「十分満足できると判断されるものの内、特に高い程度のもの」
- 4 「十分満足できると判断されるもの」
- 3 「おおむね満足できると判断されるもの」
- 2 「努力を要すると判断されるもの」
- 1 「一層努力を要すると判断されるもの」

星城大学では、2以上を単位認定とし、1を不認定としているが、義務教育では、中学校では5段階評定を、小学校では3段階評定をしている。

以上のようなきめ細かく評価をすることが、実はその先に実施する次の指導を効果的にするねらいもある。これは、指導と評価の一体化と言われており、義務教育では指導と評価の基本的な考え方として重視している。つまり次の2点がポイントである。

- ①指導と評価の一体化とは、計画し、指導したことを評価することである。（指

導してないことは評価の対象にしない。)

②評価と指導の一体化とは、評価結果を次の指導に生かすことである。

では、星城大学で以上のような義務教育の指導と評価の考え方を活用して授業の工夫をした例を挙げてみる。

## II 【例1】パワーポイントによる授業で学生に主体性を持たせる工夫事例

私がまず問題意識を持ったのはパワーポイントを使って行う授業方法の改善である。

赴任早々とにかく星城大学の授業はパワーポイントを活用して学生には教科書を買わせない最新の教授法を展開しているので、パワーポイントの配付資料は、学生がいつでも閲覧できるようにアップロードさせておくように指示があった。

しかし、数回の授業をやってみて気づいたことは、学生がパワーポイントを頼りすぎてしまい、授業への学習意欲が低いことである。読む、書く力を引き出さない大学の授業は到底容認できないと思う頃に、期末試験監督の補助をお手伝いする機会があり、そこでの試験方法は、試験問題と回答欄が学生のパソコン画面上に写っていて、それまでの授業で使用したパワーポイントシートがすべて閲覧できるようになっていた。学生は、パソコン上の回答欄に5択問題から記号を入力するだけである。多分、そこで発揮する力は、パソコン画面に問題文と回答画面とパワーポイント画面の3つを巧みに操る技能であると感じた。こうした授業や試験で高め評価する学力とその学力の観点は何なのかという考え方がないままに試験が行われていることに義務教育の常識から言って何とも納得できないものを感じた。

その頃から私は、パワーポイントを使用する授業にいくつかの工夫を加えた。

・ 学生は、パワーポイントシートを学内イントラネットで閲覧できないよう

にする。

- ・ 授業で使用するパワーポイントシート 20～25 枚の内、重要なもの 10 枚前後を印刷して配付資料にする。
- ・ 毎回の授業には導入－展開－まとめの 3 段階を設け、導入では本時のめあてを明確にする。展開では学生の身近なことから専門的な内容へと易から難への流れを作る。終了時には、この時間の要点をまとめるようにする。
- ・ 配付資料の重要用語を空欄にしておき、説明を聞き、スクリーンを見て記入させる。
- ・ ノートを作らせて板書や聞き取ったことを書き留めさせる。
- ・ 教科書を使用し、授業中に指名読ませて大勢の前で朗読する経験をさせる。
- ・ 教科書を購入させて専門知識を発展学習で一層レベルアップさせる。そのまとめのノートを期末に提出させ、評価のデータにする。

以上のような星城大学での教授法を工夫することで、少しは学生の意欲が増し、課題意識を持たせることができたのではないかと感じている。

### Ⅲ 【例 2】実学的な学習内容の工夫事例

大学の教職課程には、教員免許状を受給するにふさわしい学生を育成し、学生が教師になったときには子どもや保護者の期待に応える指導ができるようにする使命がある。

そのための大学で行う教育には、厳しいものが要求される。

教育実習を乗り切れる力を高めるとか、介護体験実習や観察実習で迷惑をかけないようにするとか、教員採用試験に合格できるようにするとか、卒業させるまでの課題は実に多彩で厳しい。

しかし、星城大学の教職課程が本当に評価されるのは、教師になってからである。特に教師になった初年度は条件付きの採用期間であるが、ここでリタイアするケースが年々増えており、全国統計で 1.4% が依願退職とのデータも



ある。1部の教育委員会では2～3%の初任者が脱落する現状にあるらしい。ここ数年の傾向からいって初任者の入門期をいかに自信を持ってなじめるようにするかが重要と考えた。

そこで、教師になって日ごろの仕事のペースに授業準備を組み込めるようにすることが必要である。教育実習で作成する学習指導案では、労力がかかりすぎることや形式的すぎることからいって日ごろの授業準備には使えない。勢い準備不足のままに授業を実施せざるを得なくなり、成果が上がらず、子どもが不信感を抱き授業崩壊や学級崩壊に陥ってしまい、自信を喪失する結果になる。

※ 中学2年生女子体育科授業  
(バレーボール)

日ごろ体育メモ  
学生番号 〇〇

氏名 初

22.10.7

学習活動	年組男女人数	単元 ( ) 月 日 ( ) 第限
<p>1.集合</p> <p>2.あいさつ</p> <p>3.準備体操</p> <p>4.準備体操(対角)</p> <p>5.内容の説明</p>	<p>本時の内容を説明、欠席確認 起立、礼(大きな声であいつさせる) 2列下体育館をランニングさせる。 体育館を前に出し、準備体操(ストレッチ)足併し仲間でバレーボールの準備を各自 生徒をバレーボールの前に集め、準備体操の説明 パスを使ってみよう、パスを返さなければならぬ、パスを返さなければならぬ</p>	<p>めあてを設ける</p>
<p>6.グループワーク</p> <p>7.基礎練習</p> <p>8.バレーボール練習</p> <p>9.集合</p> <p>10.ゲーム(パスゲーム)</p>	<p>チーム練習の際階数をグループで下見合、グループで話し合い、練習内容を決めさせる。決めた分は練習の段階にシールを貼らせる。 アンダーハンドパス(ボールは一人一個) パスを持つ世、下ハンドパス(二人組ボール一個)、人ボールを上げ、人は反対 直上パス(ボールは一人一個) ネットを上手に、バレーボール練習、一人はネットを上げボールを返し、残りの生徒は 出してきたボールをパスで返す。 バレーボールの前には、バレーボールに集める、バレーボールを見ながら対戦させる コート、対戦相手と説明する。 ゲーム前に両陣を組ませ交代を入れさせ名前を呼ばせ、いよいよ試合。 時間なくせり、パス試合は園内、7/7、(2回練習する)</p>	<p>グループ練習は身につけてやる 動きを早く</p> <p>～ある、～エス、OIC。</p>
<p>11.反省</p>	<p>グループごとに集め、今日の練習内容を振り返らせ(手紙に書かせる)</p>	
<p>【準備】筆記具 バレーボール(人数) セクション(6名) バレーボールコート ネット チーム旗 録音機 録音機(時計)</p>	<p>【準備】 コート ネット コート コート コート</p>	<p>？ どこでコートかな？</p>
<p>【評価】</p>	<p>グループワークができていないか、 内容に応じた行動ができていないか、 楽しんで行っていたか、</p>	<p>どうやグループワークができていないのか、その字を書きよみか、 (3)チームで1.2.3と声掛け合っているか ◎技能に周囲評価も必要 とする</p>

カード

学習指導案は教師教育の“実学”を学ばせるには不向きであると考えて、私は、“日ごろ体育メモ”を工夫した。初任者研修などでよく使う授業の前の計画メモである。これを作成する習慣をつけておけば初任者になってからもたつくことはない。図1)は学生が作成した日ごろ体育メモである。

日ごろ体育メモは、慣れれば20分程で書くことができ、授業の準備をする強力なアイテムとなる。授業の流れや学習活動、指導の留意点、時間配分、本時のめあて、用具、子どもの移動図、大まかな評価規準などを記入する。

また、体育だけでなく、他の教科にも応用できるところが特徴である。

### IV 【例3】毎回の自己評価を次の課題にする「学びのカード」を使用する事例

「学びカード」  
・スポーツ1 (金: 1限)  
I (金: 2限)  
・このカードが出席の記録と学習の記録になる。  
・学年のあてと感想を記録する。  
・自分のパフォーマンスと運動意欲を振り返って  
A (大変満足した) B (おぼろげ満足した) C (不満が残った) のどれかで評価する。

月日	学ぶこと	出席 遅刻 (分)	活動した感想	自己評価
10/2	オリエンテーション	出席 (分)		B
10/9	ストロークの 基本	出席 (分)	テニスは初めてで 軽いボールが楽しかった	A
10/16	バックハンド ストロークの打ち 方の練習	出席 (分)	バックハンドを打つ のが難しいけれど、打ち 方について上手にできる	A
10/30	今日はストロ ークとサーブ	出席 (分)	今日はストロークと上 打つサーブの練習を 行った。上手にできた	A
11/6	今日はサー ブの練習	出席 (分)	今日のサーブの練習 は上手にできた	B
11/13	今日はサー ブの試合	出席 (分)	今日のサーブの練習 は上手にできた	B
11/20	今日はスト ロークとサーブの 試合	出席 (分)	ストロークは上手に できた。サーブも 上手にできた	A
11/27	今日はサー ブの試合	出席 (分)	サーブが上手に できた。試合も 上手にできた	A
12/4	今日はスト ロークの試合	出席 (分)	サーブが上手に できた。試合も 上手にできた	A
12/11	今日はサー ブの試合	出席 (分)	サーブが上手に できた。試合も 上手にできた	C

月日	学ぶこと	出席 遅刻 (分)	活動した感想	自己評価
12/18	サーブ の試合	出席 (分)	2週間ぶりのテニスを したので感覚が鈍っていた	C
12/25	サーブ の試合	出席 (分)	サーブの感覚が 今たつた感じが している	A
1/8	ストローク とサーブ の試合	出席 (分)	サーブが 打てなかった 感じがする	A
1/15	ストローク とサーブ の試合	出席 (分)	サーブの 調子が 悪かった。 (ストロークは よかった)	A
1/22	最終日: ストローク とサーブ の試合	出席 (分)	今日は全部 終わった。 満足して いる。調子が 悪くない	A
1/29	予備日	出席 (分)		

記録  
感想  
第1回から、今日までテニスを通して、テニス  
の楽しさを改めて実感することができ  
ました。この学年で初めてテニスをしたので、  
テニスの楽しさを分かったことが良かった  
と思います。

留意  
事項  
こと  
\* 15回中4回までの欠席は、評価の対象にするが、5回以上は対象外となる。  
\* 欠席の割合は欠席届けを提出すること。ただし、欠席も欠席となる。  
\* 最終試合のための欠席であっても欠席となる。  
\* 遅刻は欠席とみなすこと。

図2)

大学の授業は、通例 15 回完結である。そのために多くの専門科目の知見を伝え、幅広い応用力を高めようとする大変工夫が必要となる。ディベートや小グループの検討会などは有効だが、それだけでは多くの知見を知らせられなくなってしまう。

そこで、学生の一人一人の課題や活動のチェック、授業を受けた感想等を毎回の授業で書かせる工夫をしてみた。以下、「スポーツ」テニスの授業を双方向にする「学習カード」である。

この学習カードは、①毎回の授業に明確な学習のねらいを持たせること、②出欠席、遅刻を自己管理すること、感想をまとめ次回の学習の課題にすること、③自己評価を A（大変満足した） B（満足した） C（不満が残った）の 3 段階で行うこと、④ 15 回を振り返ってまとめをすること、をねらいとしている。

## VI 終わりに

小学校の教師から大学の教師になっていくつかの発見をした。その一つに大学の教授法の原点は義務教育にあるということだ。大学は高度な専門分野を学ぶことが特徴であろうが、指導する教師と学ぶ学生との、教え教えられる関係は年齢が異なろうとも、学習させる内容のレベルがどうであろうとも普遍のものがあるように感じる。

今後さらにその普遍性に少しでも迫ってみたい。

最初にお断りしたようにこの研究ノートは、研究としての一貫性を欠いているし、大変稚拙な内容だが、5 年間工夫した内容をまとめるという極めて個人的な思いで書いたことをお許し願いたい。

## 参考文献

- 1) 学校教育法施行規則，第四章小学校，第二節第五十二条，文部科学省
- 2) 川口啓（2009）「FD・教育改善検討会議 第 2 回経営学部全体会議報告書」，星城

大学FD・教育改善委員会，P 80-83.

- 3) 川口啓編著 (2003) 「研究授業シリーズ教師の押さえどころ、勘どころ」小学校体育科1～3年生編，同4～6年生編，P 21. 明治図書.